

自主シンポジウムの記録

日本の質的心理学の歴史をつくる 日誌研究会と質的研究の方法論

日本発達心理学会第18回大会自主シンポジウム（於・埼玉大学）

2007年3月24日（土） 13:30～15:30

企画者：やまだようこ（京都大学）・サトウタツヤ（立命館大学）

司会者：サトウタツヤ（立命館大学）

話題提供者：やまだようこ（京都大学）

麻生 武（奈良女子大学）

秦野 悦子（白百合女子大学）

綿巻 徹（長崎シーボルト大学）

指定討論者：岡本 依子（湘北短期大学）

柴山 真琴（鎌倉女子大学）

*ただし、事情により綿巻氏の発表は今回収録していない。

企画主旨と概要

質的心理学の発展は、国際的・学際的に大きな新しい潮流である「質的研究」の方法論と軌をひとつにしている。それは、おもに2000年代以降、ナラティヴ・ターンを経た後の新しい方法論である。しかし、それは決して突然変異で現れた潮流ではない。発達心理学では、1930年代にピアジェが自分の3人の子どもの観察から、彼の理論の根幹をつくりだしたように、古典的研究を含め、子どもの質的な行動観察は大きな役割を果たしてきた。

日本では、1970年代末から80年代前半に、細分化した研究方法に背を向けた、マイナーではあるが少数者の熱い信念に支えられた「日誌研究会」の先駆的な試みがあった。だが、この会の活動について知ろうとしても、それをうかがい知ることのできる資料は、ほとんど無いのではないだろうか。歴史的な足取りを明確にし、地に足をつけて議論することによって、新たなものを積み重ねていく試みが真に実をむすぶだろう。今回は、「日誌研究会」の中心メンバーだった者が、その軌跡を、反省をふまえて省察（reflexivity）する作業を試みる。過去を見据えることは、未来の展望をつくることでもある。新進気鋭の研究者と共に、新たな質的心理学の方法論の行方と可能性を議論してみたい。

〈はじめの挨拶〉

サトウ それでは自主シンポジウム「日本の質的心理学の歴史をつくる一日誌研究会と質的研究の方法論」を始めさせていただきます。私は企画に携わった立命館大学のサトウタツヤでございます。それでは最初に企画者兼司会者として説明させていただきます。

今回は自主研究会ということに焦点をあて、自主シンポジウムをさせていただきます。いくつか動機がありますが、私は心理学史をやっているので、日本の心理学はどうなっているのかどのような経緯だったのか、知りたいことが多々あるわけです。特に質的心理学というのが1990年以降、急速に伸び

て学会が2000年にできた。いい感じでやっているけど、所詮、西洋の後追いだという話をする人が多いんですが、実際にはそうではないということを僕などは体感としてわかっているわけです。そういうことについて一つのキーワードになるのが「日誌研究会」という存在で、私自身、日誌研究会のことをなぜ知っているのか、定かではないんですが、そういう面白い研究会があったということだけ知っていて、その時のメンバーの先生方が今、いらっしゃる登壇者の方々ということです。後の世代の人たちに対してしっかりと語っていただいて、その当時の熱気を伝えていただきたいというのが企画側の趣旨ということになります。この後、やまだようこ先生に企画趣旨を引き継いでいただきます。それではやまだ先生、お願いいたします。

やまだ 今、サトウタツヤさんからお話があったんですけども、何年も前からサトウさんが日誌研究会についてシンポジウムをやらうとおっしゃっていたのです。私は実のところ昔のことを振り返るのはどうも気おくれして躊躇^{ちゅう}してきたのですけれども、今、振り返らないと、もう振り返れないかもしれないという危機を感じて、今回やってみることにしました。

今の時点で日誌研究会について振り返る意味は、質的心理学とは何だろうということを歴史のなかで考えることにあるでしょう。それには、質的心理学の世界적인関心と発展の中で考える必要があると思われます。日本での先駆的な研究を、世界の質的研究の歴史の中に、どう位置づけたらいいのかということにかかわるでしょう。さらに大事なのは、過去を振り返ることで未来をつくっていかないといけない。そのような歴史的時間軸上に置いて、日誌研究会の位置を考えてみようということです。

第一に、質的心理学の世界적인関心と発展との関連ということ言えば、特に21世紀以降の、世界的に見た質的研究法への関心があげられます。それは、認識論、方法論のパラダイム変換をとまっています。心理学だけではなく、社会科学、人文科学、自然科学など広範に渡る学横断的な質的研究への関心の高まりがあります。このような新しい質的心理学は、主に1990年代以降、特に2000年になってから発展したわけですが、それ以前にも、実はいろいろな古典的方法があった。特に1930年代ころまでの質的研究の古典は、

現在の質的研究ともつながっているわけです。しかし、もう一方では認識論においても研究方法論においても、現代の質的研究とは異なっているので、その共通点と相違とをきちんと位置づける必要があるのではないかと思います（やまだ、2006、2007）。

第二に、日本の質的研究の歴史に関する位置づけです。質的研究に限らず、日本の学問はよく「オリジナリティがない」と言われます。しかし、決してオリジナリティがないわけではなくて、私たちの文化風土として「舶来」の「最新流行」を追いかけやすい傾向があります。そしてすぐに忘れてしまう。それで、また同じようなものがやってきた時に、あれもこれも新しいものとして取り入れて、古いものと新しいものとのあいだにきちんと関係づけをしていかない、真に歴史的展望をもたないで、あれもこれも包容していく文化があるのじゃないかと思います。

私たちは、自分たちが生活している日本文化の土壌の中で学問を育んでいかなければいけない。過去の研究を学問知として蓄積していくということと、それを時間軸上で見通していく歴史的視点が必要だということ。そして、もう一つ、私たちが非常に弱いと思うのは、前のものと後のもの、古いものと新しいものとを対決させる、両者を位置づけて明確にしていくという、理論的対話が非常に弱いのではないかと思います。それは私自身も含めてそうなんですけど。過去を振り返ることは、過去と現在の理論的対話をするということでもあります。それを少し試みてみようということです。

その一例として、ここでは「日誌研究会」というものを、自分自身でも忘れていたのですが…、ここで少し語ってみようということです。未来の歴史をつくらうというのが一番大きな趣旨ですから、ただ過去をノスタルジーとして振り返るのではなく、きちんと位置づけて、そしてこれから何を考えていったらいいかということを展望できたらいいですね。

サトウ どうもありがとうございました。以上が企画趣旨です。それでは先生方のご紹介をさせていただきます。

パネリストとして、白百合女子大学の秦野悦子先生、長崎シーボルト大学の綿巻徹先生、奈良女子大学の麻生武先生、京都大学のやまだようこ先生。

ディスカッサントとして鎌倉女子大学の柴山真琴先生、湘北短期大学の岡本依子先生にお願いしています。パネリストの方には、日誌研究会の頃のことを語っていただいたうえで、現在のみなさまご自身がどういうご関心なのかということをお話してほしいと、そのようにお願いしております。順番はやまだ先生、麻生先生、秦野先生、綿巻先生でお願いいたします。それでは、やまだ先生からお願いいたします。